

トフルゼミナール「交換留学帰国生小論文コンテスト」受賞作品（金賞）

山邊 鈴 （AFS66期・2019年夏出発 インド派遣生）

「グローバル人材」「地球市民」「多文化社会」

おもえば以前の私は、このような言葉に正直飽き飽きとしていた。中でも顔を歪ませたのは、「異文化理解」の五文字だ。

今まで外国の人と交流してきたけど、何も問題なかったよ。何をいまさら。

そんな勘違いをした私は、「異文化理解を超えた何かを掴む」ことを留学の目標にしていた。

今あのときの自分に会えるならば、是非とも強烈にビンタしたい。

意気揚々と旅立つはずだった私は、出国前からその難しさを感じ始めることになる。

まず、ビザが発行予定日に届かない。たった数日出発が遅れるだけで涙が溢れそうで、まるでこの世の終わりであるかのように思えた。

何も思い通りにいかなかった留学だった。

デリーから丸一日かけて鈍行列車でムンバイへ。

そこからまた車で5時間かけて山を登り、小さな村に到着。

恐る恐る家に入ると、ホストファミリーは英語をほとんど喋らない、地方の言語であるマラーティー語だけを話す人たちだった。

食卓につくも彼らが話していることを全く理解できない。

インドの上流階級は英語を話すから大丈夫って去年の派遣生は言ってたよね...？

真っ青な顔で、私のインド生活は始まった。

言語も毎日耳にするうちに身についてきたし、トイレトペーパーを使わない生活にも慣れてきた。

しかし、私は自分の能力を十分に発揮できないストレスを抱え始めた。

翌日の旅行の予定も曖昧だし、二時間後のパーティーでダンスを披露してくれと言われてたりする。

日本にいるときは予定を立て「準備」「練習」をして結果を出すことが喜びだった私にとって、努力ができないことはプライドが傷つけられるようなものであった。

8月9日。

長崎出身の私は、原爆の恐ろしさを伝えるためプレゼンテーションをさせてほしいと頼んだ。

「インドにはまだ沢山の核兵器があります。核軍縮のために皆さんの協力が必要です。」

すると、観客の一人がこう言ったのだ。

「インドだけは核を持っていても大丈夫なんだ。今まで自分から戦争をしかけたことがない、平和の国だからね。」

この言葉を聞き、私はやっと気づいた。

彼らは全く異なる教育を受け、全く違う正義を持っている。

私の正解は誰かの不正解なんだ。

日本で上手くいったやり方を押し通しても絶対に成功しない。

相手に応じて自分を変えていかなきゃいけないんだ。

それから徐々に異文化の中に自分があることを受け入れることができるようになった。

デング熱にかかって入院したとき。

病院の看護師さんは、英語もマラーティー語も理解しないヒンディー語話者だった。

以前の私なら「安全な医療が受けられない！」と憤慨したに違いないが、「ヒンディー語を学ぶチャンスだ」と肯定的に捉え、看護師さんと友達になることができた。

違いを楽しめるようになってきた私は、「異文化理解のその先」に挑戦しようとするプロジェクトを立ち上げた。

スラム街の子どもたちを主役にしたファッションショーだ。

「あの子はスラム育ちで臭いから一緒に遊ばない」。

そんな言葉を優しいホストシスターの口から頻繁に聞いていた私は、差別意識が悪気なく日常に根付いていることに気づいた。

長いカースト制度の歴史から生まれた感情は、私が説得したところで簡単に変わらない。

ならば、みんな同じ人間だということを自然に思えるような出来事があればいいんだ。

しかし、ショッピングモールを借りるようとするも「スラム街の奴らなどお客様にお見せできません」と断られたりと、

生まれ育った文化圏以外で行動を起こすには異文化理解の努力はどこまでもついてくるのだと実感させられた。

度重なるトラブルに悩みながらも、世界中から集まったお洋服と共に最高級のモールでショーは実現した。

スポットライトに照らされた子どもたちとショーを純粹に楽しむ観客の笑顔を、私は一生忘れない。

ショーが終わった3月1日。コロナウイルスがインドにも蔓延しはじめ、町では「中国人、死ね！」と石を投げられるようになった。

近所の人も「この中国人はコロナウイルスを広めるためにここに来たに違いない」とホスト

ファミリーを非難し始めた。

だけど私はそこで泣いたりはしなかった。

村は共同体意識が強く、部外者に敵対意識を持つことはあり得ると学んでいたからだ。

様々な背景が重なって人間は特定の感情を持つのであり、彼ら個々人の責任だけでないという考えが思い浮かんだとき、

「自分、成長したな」とニヤケてしまった。

結局 3 月の下旬に私は帰国したが、ただ運命を受け入れ、満足した顔で成田空港に降り立つことが出来た。

想定外の連続のインドで鍛えられた成果だと思う。

「堅いものは、すぐ壊れちゃうからね。」

ビザの影響で東京で立ち往生していた私を、インド派遣の子のご家族がお家に泊めてくださったときのことだ。

高校留学経験者のお母様が、こだわりが強く小さなことで慌てる私を抱きしめ池袋駅でかけてくださったその言葉は、今の社会にも通じるものだと思う。

コロナウイルスが私たちに教えてくれたのは、「当たり前」の脆さではないだろうか。

当たり前に行けていた学校、会えていた仲間。

それが当たり前でなくなった今、ただ現実を嘆くのではなく、それをどうワクワクする未来に変えられるのか発想を柔軟にする必要がある。

Black Lives Matter 運動が活発化するなど、差別が問題として取り上げられる今日。

大多数が気づかないうちに人を傷つけてしまう原因の根本は、「自分の正義が世界の正義だ」という勘違いではないか。

そのような思考の凝り固まりをなくすには、どうすればよいのだろう。

やはり私は、交換留学が最も有効な手段だと思う。

マイノリティーに立ってみる。自分の正義が通用しない場所で生きてみる。

それも、まだ失敗が許される 10 代のうちに。

この今しかできない経験が出来た私は、この幸運を享受できる地球を次の世代に渡すため、正解のない荒波をインドで得た自信と共に泳いでいこうと思う。